

ローカル・ルールの前に泣く人ほくそ笑む人

「離農奨励金2ha以上の場合には70万円支給!」。前月号の続きである。

報道によると予算規模は66億円に支給される計画のようだ。正直言つて今までのご苦労、国民の食の安全、安心を支えてきた生産者に対する退職金なので、もう少し出しても良いのではないかと思うが、限られた予算配分なので、ないよりはまし。そんなことよりも規模拡大に向けて小さな一歩ではあるが、これから小さな農家がどんどん消えて行く、いや農地が集積されていく歴史的過程を拜見できることは、1流から3流、もしかして大根役者が勢ぞろいした大舞台を花道のそばで見られるようなものなのだから、入場料としては安い。次世代に禍根を残すことにはならないし、FTA、TPPをにらんだ世界の動きに対応する政策である。だが、すべて万々歳ではない。

条件は現実に採配を振ることになる農業委員会の下部組織である利用改善組合を利用することだ。つまりムラ社会の同意を得ることが前提の様だ。この利用改善組合については先月号で説明させていただいたので、今回はその側面について語ろう。

このような利用改善組合を作った当初の意図とは何だったのか？

多分戦後の新地主を誕生させないため、非資本主義の貧農を集める苦肉の策にも思えるが、やはりもつとたちの悪い貧困に輪をかける**小作人根性**だけの集団だけでは心もとなかったのだろうか。そしてもつと残念なことは、生産者や農協の思惑が右往左往する生産現場ではかなり意識的にローカル・ルールを助長する環境作りに貢献している場面に出くわすのがこの制度の特徴である。

今年私が経験したことを話してみよう。1月に2ha程度の農地が利用改善組合に持ち込まれたらしい。「らしい」と言うのは私には声がかからなかったのだ。言い訳は決まっている。「班で決めた」「米国に行ったから連絡がつかなかった」とでも言うのだろうか。今どき海外に居ても携帯はつながるし、ショートメール、パソコンを持って行ったのでPCメールだって可能であったが、連絡はなかった。まっ、こんなことはロー

ムラ社会にイラッとしませんか？

Vol.43



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約1億円。

Illustration by Kazushige Akita

カル・ルールではよくあることなので、目くじら立てて怒ることもないが、日頃から「地域が…」とか「みんなの利益…」などと極東アジアの理想高きムラ社会にはどのような未来が待ち受けているのだろうか。

その後、4haほどの農地がやはりこの利用改善組合に持ち込まれた。3月になりさすがの私も金髪・ブルーアイ・モードから個人的に食さない味噌汁、沢庵、

オレにも 言わせる!

北海道長沼発 ヒール宮井の憎まれ口通信

ウソ、真性の偽善がいつぱいあるムラ社会に完全移行した時期（日本に帰って来たと言う意味）なので、さすがに連絡が入った。誰がその農地を購入するのかいろいろな駆け引きが行なわれたのであろう。そんな時、同じく農地の購入希望を出していたTちゃんがこんな提案を出していた。「宮井さんが決まったら、〇〇の土地と交換しない？」つまり、彼にとつても私にとつても良い話、と言う意味である。その際の条件として彼が今回の農地売買に関して手を下ろす、だった。しかし結果は手を下げるはずのTちゃんが再度手を上げ、購入することになった。

Tちゃんは「裏切り者の嘘つき」なのか？ そうなのかもしれないが、利用改善組合がすべてを決めるという結果に従ったにすぎない。Tちゃんは真面目な生産者であるから親しみを込めて「ちゃん」を付けられるのであるし、以前、何とかモデル事業で騒ぎになった時には「本気でやるんだったら、みんな宮井さんに付いて行くんだぞ」と言ってくれた良き理解者でもある。うれしきのあまり、私は「じゃ組換えをやるか？」と聞き直したところ、彼は「いや、それは…」とビビってしまった。チョー現実派でもある。

注視してみると、この組織で発言

力が強いのは積極的に規模拡大を目指す生産者ではなく、ある程度経営的に安定した生産者のように思う。そうになると、どうしても人の常として自分に近い人を取り込むようである。結果、地域では突出した大規模な生産者は出づらくなり、より平均的な規模の生産者ばかりになる。そのこと自体が良いとか悪いとか言っているのではなく、このように法律で認められた誉れ高き組織であるのだが、もっと一般社会に則した対応は可能ではないかと考える。その一例が**入札制度の導入**である。

つまり農地の売買と価格はその地域で札を入れる入札制度に出来ることも可能にすべきである。本州ほどではないが、選挙と農地の売買は末代まで尾を引くようである。選挙であれば3、4年ごとに入れ替わりも可能であるが、農地の場合はもっと長く人間関係に悪影響を及ぼす。この悪行を助長する制度を利用するのも生産者とその関係者の得意とするところだ。つまりこれは官製談合そのものである。恥ずかしくないのだろうか。一般社会では身を削る思いをして競争入札を実施しているのに、この農村社会では何とも平和ボケと言うか、飼いならせた囚人とも言うべきなのか……。勇氣を持って発言させていただとす

るならば、意見程度の発言で終わればいいものを、間違つて法的な実行力を持たすことで、農業生産者のみならず、農業そのものを**勘違い**させているとしか思えないのである。

なお長沼町の一部ではこの農地の完全競争入札制度を取り入れ、後腐れのない健全にして進化する農村社会を目指す地域がある。単純に人間関係に頼っていたら、最後はその人間関係で壊れて、発展しなくなるのもムラ社会が日本の歴史で経験したことだ。良いではないか、札束握って相手の顔を殴り、その汚れた手で心臓をまさぐる行為も民主主義のひとつであつても。

本年を振り返ってみて

本年もいろいろなことがあつた。スガノのハーフソイラーには驚いた。私はジョン・ディア製のサブソイラーを所有しているが、正直言つて排水対策用としては満足していなかった。硬くなった耕盤を砕くのは最高ではあるが、ある程度、水みちをつくり、水の引きを維持するのはこのハーフソイラーは最適だ。

昨年から排水対策を考えていて、スガノの営業所と一緒に考えていたが、新品のハーフソイラーを一式購入することはためらつていた。そこでジョン・ディア製のサブソイラー

を改造してこのハーフソイラーを装着する提案があつた。東日本大震災の影響もあり、納期の遅れを心配したが、予定通り春には作業できた。取り付け位置、ボルトの位置、高さなどのバランスの良さには驚いた。やはり米国製にはない追従式ウイングは破碎効果と空間維持には最高のアタッチメントのようだ。

ただこのハーフソイラーは作業した土を地表に持ち上げないので、後の作業が容易であるが、土との接地面が垂直なため一般的なサブソイラーよりは抵抗を受けやすい。今まで4本でできた作業がハーフソイラーでは3本で同じトラクターの速度作業になる。しかし総合的なことを考えればこのハーフソイラーをもっと早くから使用すべきだった。

スガノさんと言えは3代目の社長をされていた菅野祥孝氏が亡くなられた。故人とは10年くらい前に初めて話をさせていただいた。正直言つて気取つたオヤジだなくらいに思つていた。お別れの会が北海道・上富良野であつた時に、「この病を受け入れます」と告げたという話を聞いた。海外の紛争を見ると人間、死に際でその人の今までの評価が決まることもあると実感した。そして多かつたことを語り合つておけばよかったと思つた。